

## 第12回全国学校飼育動物研究大会開催報告

全国学校飼育動物研究会 会長 宮下 英雄

日時：平成22年2月7日（日）午後1時～午後5時（12時からパネル発表）

会場：東京大学 弥生講堂

テーマ：継続する動物飼育とその評価

講演：宮下英雄会長 「実践事例から見る動物飼育とその評価」

参加者：243名（教員・大学・教育委員会など教育関係者、獣医師会員、保護者、マスコミ 他）

来賓：文部科学省初等中等教育局教育課程課 社団法人 日本獣医師会 東京都教育委員会  
社団法人 東京都獣医師会 一般社団法人 日本小動物獣医師会

参加者は、東京や神奈川、埼玉からの参加者が目立ったが、北海道の小学校教諭や沖縄の教育大学教員など、全国31都道府県からの243名であった。内訳は、文部科学省関係者をはじめ、教師、教育大学生や教育委員会など教育関係者が52%、獣医師会、開業獣医師、獣医学生など獣医師関係者31%、マスコミ、保護者や愛護関係を含む一般が17%であった。なお教育委員会の方は、東京都をはじめ、さいたま市、京都市や福井県などから参加された。

### § 開会挨拶

来賓の文部科学省の係官は、鳩山総理が施政方針演説において、多岐にわたっていのちを守るための思い・取組を話され、また、いのちを守るための理念の一つとして「新しい公共」をあげ、人と人が支え合い、役に立ち合うことも話されたことを引用し、学校教育では、子どもたちにこういった社会性や思いやりなど、豊かな人間性を育むことが重要であるとした。豊かな人間性を育成するには、自然や生き物への親しみを持ち、大切にするとともに生命を尊重する心や態度を育成することが非常に大切であり、新学習指導要領に、「継続的な飼育」が明記された。小学校学習指導要領は平成23年に全面実施され、文科省はその円滑な実施のために必要な条件整備を講じていく。なお、教育の振興には、国民の共通の理解を得ながら、学校・家庭・地域の方々が一体となって取組むことが必要で、特に学校の動物飼育をより充実するためには、校長、教員、保護者、地域の獣医師の方々などとの連携が大切で、これからもご理解とご協力をお願いしたいと述べられた。

また日本獣医師会は動物飼育支援対策検討委員会を設置しており、配下の全国の55地方獣医師会が全国の学校等の動物飼育を支援する体制を整いつつあることを案内した。また、本研究会が、科学的に飼育の教育への成果を発表できるように期待を述べられた。最後に、毎年動物飼育作文コンクールにかかわっている東京都教育委員会は、生命尊重の心情を養う体験としての動物飼育の意義を述べられ、より一層充実した飼育活動実現のために、獣医師会の支援に期待を述べられた。



中川秀樹 日本獣医師会副会長

### § 講演：宮下英雄 本会会長、聖徳大学大学院教職研究科教授

先生は、飼育活動を取りまく環境として、学校教育法、学習指導要領、動物愛護法、そして学校衛生法など、法律とのかかわり、生活科や理科、道徳、総合などの学習活動とのかかわり、地域やPTA、管理などの学校運営とのかかわり、動物愛護とのかかわり、獣医師会との連携などの教育行政とのかかわり、そして子どもたちには、実施・世話をとおして、生命尊重の態度育成、子どもの変容などとのかかわりがあると話した。また自身が、長く審査員長をつとめられている東京都教育委員会と獣医師会が共催する「動物飼育作文コンクール」での審査から、飼育活動の効果を①動物を良く見て、動物の気持ちになって世話をする ②毎日の



せわの努力の積み重ねにみられる優しさ ③動物と会話し気持ちをわかろうとする ④動物の命には限りがある（獣医師の支援を得て科学的な刺激も得る） ⑤感動体験が表現を豊かにし、文章の構成が上手になる、などに見られると述べられた。

そして、子どもに適切な刺激と、教育効果を与える飼育活動実践には地域の専門家の支援が必要とのべ、教育委員会や学校は積極的に獣医師会と連携をすすめるようにと強調された。

## § 口頭発表

### ① 「岡山県内小学校の飼育動物の現状分析」 清心女子高等学校生命科学コース 2年

小学校での飼育活動が意識されていないのではないかと、考え、このグループは県内の小学校の現状調査をおこなったが、研究班代表が、県内の小学校 360 校の飼育担当教師から得た回答をもとに分析結果を報告した。それによると鳥類の飼育を止めたところが目立つこと、問題があってもだれにも相談しなかったこと、雄雌の鑑別もできないなどが報告された。また生徒への調査では、実際に飼育にかかわらなかった子は当時動物がどのように世話されていたかを認識していないこと、サンショウウオの飼育をして初めて希少種の大事さに気付いたことなどを報告し、継続して飼育を経験することで、慣れや愛着が沸き、周囲の自然環境を考えるきっかけになりうると報告した。秋山繁治同校教諭のご指導のもとに発表なされたが、堂々と発表し質問に答える様に聴衆は驚き感動した。



### ② 「チャボはみんなのお友達・幼児の体験教育」



### 学校法人大和郷学園 大和郷幼稚園

ここでは歴史的に、情緒豊かな人間形成をめざして、校務分掌に飼育を位置付けているが、今回、下郷奈緒子教諭と向山陽子園長が、日々子どもたちが動物とすごして、小さな動物に思いをかけて成長している様子を報告なされた。たとえば「豆まき」のとき、庭で鬼に向けて大騒ぎで豆をまいていると、チャボの家族が近くで豆を食べようと待っている様子や、次の日もまだ庭の豆を探して食べているのを子どもたちとともに楽しんでいるとのことであった。またひよこが生まれ、

それをつぶさないように先輩の子が小さい子に渡すなど、気遣いとかわいいとの表情があふれる子どもの写真を提示して報告した。また発表会で、子どもたちがチャボの家族が産卵しひよこを育てる演技を行い、さまざまな気づきを発表した映像を紹介した。なお、資料として指導年間計画表と最近数年間の飼育・栽培活動報告表を提示したが、動物の個体名を記しての活動や死亡などの記述が印象的であった。

### ③ 「『最低の飼育環境』からの脱出を目指して」 東京都檜原村立檜原小学校

奥山教諭が、赴任校での飼育の状況に胸をいため、飼育担当を買ってでて、沢山の餌を調達したところ、繁殖しすぎて先輩教諭に怒られたことや、自分も児童も子ウサギを引き取ったが、それでも 20 匹余の世話は大変だった経過を話し、最後に東京都の教員研修で講師であった中川美穂子東京都獣医師会理事に相談したところから、地域獣医師会の支援を得ることができ、少しずつ改善したことを報告した。それまでの困難な飼育状況の経緯に聴衆は驚き、奥山先生の努力に感動した。奥山先生はまた、現在は、子どもたちが動物に親しむようになり、飼育活動による心地よさが周囲に波及してきたと感ぜられるようになったので、これから新たな方策を立てられるとの希望を語られた。座長の桑原副会長は、困難さを話してくれたことに感謝し、このような飼育は多かれ少なかれ、

どこにでもあることなので、近くの獣医師会、又は本研究会に助けを求めてもらいたいと、支援体制を紹介した。

#### ④「委員会活動から4年生の学年飼育へー総合的な学習における「飼育」の指導ー」

東京都西東京市立保谷第二小学校

4年生の総合の学習の時間に飼育活動を位置付けている学校。4年の担任の齋藤弘子、北原祐子、杉山亜耶教諭が、この体制になってから今年で8年になり、自分たちも校長先生も3代目であると話はじめた。年間計画にそって毎年活動しているが、日々の世話や死に際してなど、市による獣医師会の連携体制のもと、さまざまな体験と知識を子どもたちに与えることができると報告した。また子どもたちの体験からくる言葉があふれる作文の紹介もあったが、一番の飼育の課題である休日の世話について、完全に4年生の保護者をシステム化している方法を報告した。4月には、旧4年生の保護者に対応してもらい、年を通じて休日の世話は対応出来ている。昨年、教師が世話したのは、台風やインフルエンザによる学年閉鎖など、急遽休校になった時だけだったと紹介し、「命には休みがない、と子どもたちに知らせるために、保護者が教育に協力する」と体制を、参加者に示して下さった。



### § パネル発表

#### 1 「学年動物飼育が動物に関する知識および心理的成長に与える影響

小学4年時から6年時までの縦断研究

白梅学園大学大学院の無藤隆教授のグループ中川美穂子（本会事務局長）、中島由佳（日本学会会議）が、小学4年生を対象に、一年間飼育するグループ（学年全員でかわる）としないグループ（飼育委員会方式のため、4年はかわらない）を比較した。また学年飼育方式でも、教育的な目的を持って教師が指導的にかかわる学校と、従来の委員会活動のようにほとんど教師の指導がないグループに分け、その3者で心理的成長などを比較したところ、学校で教育的継続飼育した子ども達は、人への優しさや学校適応への良い影響が大きく、かつ飼育活動終了一年後でも、他とは有意の差をもって、これらの良い影響が身につけていたことが、現れていたことを、グラフも交えて報告し、幼児から高校までの学齢により、それぞれ飼育活動の目的と方法を持つことを提言した。

#### 2 「獣医師会獣医師会の取り組み「動物飼育ポスター発行」 社）福井県獣医師会

#### 3 「愛知県獣医師会の取り組み」

社）愛知県獣医師会

福井県では行政と獣医師会との連携・協力は報告されていないが、獣医師会は飼育支援の気持ちを教育関係者に知らせるために、独自に壁新聞を作って、県内全公立小学校に配布している。また、愛知県獣医師会は、県内でふれあい教室による授業支援を展開しながら、教育委員会の協力の下に、同様に壁新聞を作成し配布している。今回その取り組みの様子と壁新聞を愛知県獣医師会の学校飼育動物委員会杉本寿彦委員長と三浦裕之委員と福井県獣医師会が紹介していた。



#### 4 「動物たちとともに育つ子ども達」 滋賀県大津市立瀬田東小学校

辻川佳奈先生が、180センチ幅いっぱい子どもたちや動物の写真、また獣医師の支援の様子など説明を沢山つけて展示なさった。クジャクなどもいた従来の飼育が、現在の飼育委員会児童を中心とした多くの児童がかかわる飼育態勢に落ち着くまでには様々な紆余曲折が見られたとのことだが、現在は地域獣医師会の支援をうけて、学校の動物とのふれあい教室や、教員への支援を得て

いる。先生は、そのなかで学校現場における多くの課題に気づくと同時に、子どもたちが動物たちと共に成長する姿を目にすることができたと報告した。参加者の獣医師が、発表を見て、「地味だが、こういう基本的なことが大事だ」と、もらしていたのが印象的であった。

## § 講評とまとめ： 村山哲哉 文部科学省 教科調査官

### \*各事例について感想

- ①岡山の高校生の発表について、飼育をしていない学校は少ないことと、その扱い方に課題があることを示した貴重なデータであると評し、次回は、飼育環境も調べてほしい。
- ②幼稚園の発表について、チャボが園庭で子どもたちとともに過ごしていることは、さまざまな視点からの観察ができ、気付きを誘うため、大変よい試みである。
- ③飼育改善途中の学校に関して、内情を教えていただき感動した。一人の先生の努力が周りを動かし、だんだんに広がりが飼育の充実につながり、やがて本校の伝統的な取組となるように頑張ってもらいたい。
- ④保護者と地域獣医師会との連携が確立されている保谷の小学校の実践について、必ずすべての子が卒業までに動物飼育を体験させること、保護者との連携、獣医師との連携なども充実して、子どもたちの体験ならではの言葉も生じているなど、よい取り組みである。子どもたちに誇りをもたせてほしい。このように、ほかの学校も困難があっても、成果を信じて取り組んでほしい。

なお、それぞれの学校や地域なりに取り組んで行くことが大切で、飼育活動を取りまく皆さんで少しずつ負担をして、成果を上げて確認しながら進んでほしい。



### \*理科と飼育活動について

飼育活動には、主観的なかかわり(生活科)を基盤としながら、客観的なかかわりを持たせることが大切である。

この客観は、理科の学習につながるゆえに、飼育は理科に位置付けられている。特に4年生理科では人体の構造や季節の動物を観察するが、野生や飼育動物を継続観察することで、生体の仕組みや変化を知ることができるので、飼育活動は学習活動の一部となる。

観点は、①生命の連続性、神秘性を知る(生物愛護、生命尊重の態度を養う)②生命と環境についてのかかわりを観察する③長期にわたり観察できる。④飼育を通して自然への興味関心を持たせる(意図的、計画的に与える)⑤生命を育む心情と責任感を与える(言葉ではないものを感じる力)である。

### \*学習評価に関して期待すること

教育活動には不易と流行がある。本研究会の目標に関して言えば、飼育活動をして「生命尊重」が「不易」であり、飼育活動へのアプローチの仕方が「流行」であると言える。この春に文部科学省から各教科についての評価の観点と趣旨が通知されるが、理科や総合の学習の時間、道徳などについて、本研究会で生命尊重に対して、飼育動物とのかかわりにおける評価規準を作成してほしい。我々教科調査官も協力する。

なお、動物とのかかわりを体験し、それはやがて経験となり、それが記憶され、言語化されることにより、思考力、判断力、表現力の育成につながる。ぜひ、その経験を言語活動に結び付けてほしい。幼稚園では劇活動が言語活動の一部と言えるであろう。それにより思考力、表現力、判断力を育てることにつながる。こうしたことから、作文への取組も充実してほしい。

